●本誌は日本に於ける婦人運動の先驅也

世界婦人

婦人の威嚴

安部磯雄

明治廿七年の秋余は英國を去つて獨逸伯林に至り其所に五ケ月間滯在することゝなつた。余は僅に獨逸語を讀むのみにて、これを話すことは出來なかつたから或人の世話にて多く英米人の宿泊せる下宿屋に居を定むることゝなつた。亦獨逸語を學ぶ爲には一人の教師を依賴し、每日一時間づゝ其人の宅に通ふたのであるやがて一ケ月も過ぎると大概の用事は獨逸語で辨ずるやうになつたから、最早英語を話す下宿屋に居る必要がなくなつたので、余は終に此教師の宅の一室を借りることゝなつた。

教師といふのは六十歳許りの人で夫婦の間に三人の娘があつた。娘といふのは總領が廿七歳で、一番若いのが廿一二歳位でもあつたらう、可なり教育は受けて居るようであつたが、何れもまだ獨身者であつた。主人は嘗て廿年間も印度に傳道して居たといふのであるから、余は彼の勸めに從ひ直に彼の家に下宿したのである。下宿としては餘り滿足ではなかつたが、獨逸語を修むる爲には此上もなき便利があつた。主人は某役所に勤めて居て終日不在であるから、晝飯の時には余は妻君と三人の娘を相手にして盛に談話を試みたのである。これが爲め獨逸語の進步は自も不思議と思ふ程早かつた。然し餘り調子に乘りて喋舌て居たゝめ一日飛んでもなき失策をやつた。

余は或時婦人の涙脆いことに付きて話して居たが、何の氣もなく『婦人の泣くのと鵞鳥の尻を振つて步むのとは自然の性である』といふ諺があることを言つた翌日年若の娘は余が室に來りて坐敷まで來て呉れよと言ふので、余は應と答へて其處に行て見れば、三人の娘が嚴然として控へて居るのである。

「何か御用があるのですか」

と椅子を引き寄せながら余は問ふた、

「あなたは昨日私共を大そう驚かしましたねえ」

と姉娘は先づ口を開いた。

余は暫く何の意味なるかを考へたけれども少しも思ひ當る所がなるので、其何事なるかと問ひ返した。

「あなたは『婦人の泣くのを鵞鳥の尻を振つて步むのとは自然の性である』と言ひましたねえ」

余は忽ち余の失言に氣が附いた。獨逸にては鵞鳥とか驢馬とかいふことは馬鹿といふことを意味するのだ、婦人と鵞鳥とを比較したのは全く余の不注意より出でたので、今更何と辯護の仕樣もなく、唯平あやまりにあやまるより外なかつた

「いや、あなたがそんなに詫びて下さつては却つて私共が恐れ入ります。昨日も私共がいやな顏をしたのを見て母は私共を叱つた位です、兎に角一度は申上げて置かないと氣がすみませんから、つい失禮いたしました」

余は此事を思ひ出すと今日でも汗が出る樣に感ずるのである。

世の父母に告ぐ

赤羽生

僕は世の父母諸君に對して嚴肅に考へて貰ひたい一事がある　それは現社會に於て、諸君が掌中の珠と愛撫しつゝある諸君の子女の運命如何と云ふ問題に就てである。

世の父母諸君、現在の社會は恐ろしき社會である、哲人セネカの所謂る凡てが罪惡を以て滿たされて居る社會である、不義と兇暴とが時を得顏に跋扈して居る金力と權力とは無上の勢位を揮つて居る、而して暗憺として物淒き天地には百鬼舞ひ躍り、四邊は詐欺と僞善と淫猥と猜忌の空氣を以て充滿して居る社會である。如此社會に於ては聖人と雖も其の淸潔を保ち得ない、況して思慮未だ定まらざる君子の子女に於てをやである。

世の父母諸君、人は境遇の子である、時代の影である、されば諸君の子女が、現社會の穢れたる空氣に觸れ、惡しき習俗に染みて、其の肉體と品性とが、日々に汚下し、腐敗し、墮落し行くは正に理の然るべきである。故に諸君は、諸君の子女の腐敗墮落を責むる前に、先づ社會夫れ自身の腐敗と墮落を嚴責せねばならぬ。

（六面の記事參照）

世の父母諸君、譬へて見れば、現社會は一個の猛惡なる毒蛇である、彼は銳利なる牙を鳴らして諸君の子女の肉體と精神とを噛み殺さねば已まぬのである、看よ、諸君の眼前には、愛々たる多くの小兄弟小姉妹が、毒蛇の牙にかゝり、殆ど半死半生の體にて呻吟苦惱して居るでは無いか。かくても諸君は尚ほ安閑として家庭の奥に引込んで、我が世安然なりと澄まして居ることが出來るか。

世の父母諸君、現社會は諸君の女をして女郎たらしめ、賣淫婦たらしめ、酌婦たらしめて居る社會である、諸君の子をして詐欺師たらしめ、盜賊たらしめ、幇間たらしめ、奴隸たらしめて居る社會である、何故と問ふか、愚昧なる諸君なるよ、敢て問ふ、諸君は諸君の女を遊廓の中に置きて、尚は節操の潔きを望まんとする乎。諸君の子を山賊の群に托して尚は道德の高きを期せんとする乎。諸君は克く知らねばならぬ、風俗紊亂の點より言へば、現社會は正しく一個の遊廓であり、而して道念頽廢の上より言へば、正に純然たる盜賊の山寨に外ならぬことを。

世の父母諸君、諸君は諸君の腕に凭りて眠れる愛兒の無邪氣なる顏を見る時、諸君の膝にまつはれる愛女の美はしき黑髮を撫づる時、諸君は夢にも思はぬであらう、自己の愛兒が他年成長したる曉、社會と云ふ殘忍非道なる學校に敎へられて、虛言者となり、僞善者となり、スリと爲り、幇間と爲り、賣淫婦に爲らうとは、假令諸君は夢にも思はぬにせよ、かく爲るべきは現社會に於ける諸君の子女の所詮免れぬ運命なるを如何にせんやだ。現社會の腐敗せる空氣と、汚濁なる境遇とは、到底諸君の子女を驅つて、虛言者、盜賊、詐欺師、賣淫婦、幇間、殺人者たらしめねば已まぬのである。

・世の父母諸君、諸君は實に憫むべき蝸牛でゝある。諸君は家庭と云へる極めて小さき殼の中に身を蟄して我が世太平を歌ひつゝあるも、焉んぞ知らんや其の窓前には惡社會の濁浪、滔々山を爲して押し寄せ來りつゝあらんとは。諸君にして若し眞に自己の子女を愛するならば、諸君は猛然家庭の中より躍り出して、我が家庭及び愛兒を虛言、詐欺、盜賊、幇間、賣淫、殺人の谷に押し流しつゝある現社會の濁浪を防がねばならぬ、かくして諸君は必然に社會改革家と爲らねばならぬのである。

讀者諸君に請ふ

「世界婦人」讀者諸君よ、諸君の同胞にして同じく力を國事に盡し、數奇不遇、志成らず同じく非命に死し、一は其名甚顯はれ、一は多く世に知られざるものあらば兩者の不遇は人皆な之を憫れむ。中にも殊に一掬同情の涙は、その未だ世に知られざるものに灑ぐこと多きは自然の勢である。余年來時事に感ずる每に、德川時代の歷史中農家の志士に於て、最も趣味を感ぜしむるものは、百姓一揆の事蹟であらうと思ふ。是等民權擁護者の傳記及び事實を調査せんとするもの數年、余不肖身邊多忙、未だ其意を果さゞるを憾む。頃者病間を以て如上の傳記を編纂せんと欲す。讀者諸君にして正確なる記錄あらば其、書名御一報又は物件を附して借覽の榮を賜らば幸甚

和歌山縣那賀郡根來村

四月七日　増田操

●本誌を讀まざるものは眞の婦人に非ず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

男子自治の實驗

久津見蕨村

福田英子女史足下　僕は今日で滿一年間九州の一端、日本最初の西歐文明の輸入地で暮してをる。此間に女子の獨立とか、婦女解放とか云ふ重大な問題に關係のある男子側の或る事柄を經驗した。夫れで之を御話して見たいと思ふ。併し之は僕の平生に似合はんで毛頭議論ではない。全く僕一個の實驗だから、先づ寫實的の筆で申上やうと思ふ。

僕は明治三十八年十二月廿三日午前入時に長崎へ着いた。固より單身。それから或る家に下宿した。久しい以前の書生時代に返つての下宿屋生活であるから、さぞ〳〵不自由だらうと人は云ふた。けれども僕は左のみには思はない。結句或る點は至極呑氣で自由で蒼蠅なくて甚だよろしいと感じてをつた。

飯は持つて來てくれる。寢具の上げおろしは下女がしてくれる。又してくれんでも夜具の上げおろし位は何んでもない自からズン〳〵やる。衣服の始末も下女が氣を付けてタヽンだり仕舞つたりしてくれる。けれども僕は之を自身でやつた何んにも面倒臭いことはない。却つて郷事にたゝめて宜しい。

十二月の廿三日と云へば、年の暮だ。夫れから暫くは世間がザワ〳〵と忙がしかつたが。僕は獨り閑なものであつた。毎日朝飯を喰ふと一時間ばかり新聞、雜誌と書物とを讀んで、それから社へ行く。そして論說を書く。之が一時間半ばかゝる。書いて仕舞ふと社に來てをる手紙や全國の新聞を讀んで返事をやるものは夫々書いて送る。その中に晝飯になる辨當を食ふ。午後は他の編輯員の書いたものを校閲してやる。用談の人が來る。之に相手になる。其内に一日の業務が了へて下宿にかへる。先づ五時六時の間である。之から湯屋へ行く。歸つて夕食をやる。もう之で一日の事は濟んだのだ。ソコで晝被て居た衣類をぬいで平常着に着かへてぬいた衣類をたゝむ。十分とかかる仕事ではない。そして先づ一寸仕舞ておく、之から散歩に出る。長崎中を歩いても僕の根岸の家から福田さんの角筈の御宅までの道程はない。一時間ばかりで歸宿てそれから、東京へやる原稿を書くか、書物を讀むかして十一時頃まで起きてゐる。十一時が鳴ると下女に夜具をのべてもらふて寢に着くのである。但し自身でのべた時もあつた。

之を毎日繰返へして、而して今日になつた。一年經たのだ。尤も其間には隨分不規則なこともあつた。毎日の日課を繰返へすとの出來なかつた場合も少なくはない。又衣類のホコロビや垢付き汚れたこともあつた。其場合でも自分で注意してボタン位なら獨りで付けた——素より針と糸とは用意してある。自分の手に合はんものは下宿屋のおかみさんにやつてもらふ。洗濯物は洗濯屋にやる。少し注意すれば獨りでズン〳〵甘く行く。少しも妻君の手を！煩はさんで決して下宿屋生活の書生さんのやうにいつも薄汚穢服裝をして居ることはない。尤も衣服丈は最初の内は東京の妻君の所から送つてもらつた。併し之も縞柄の好みやなんかどうも自身でやらんと面白くないから、後ちには長崎で自から買ひ整へて仕立屋に縫はせた。こうしたので結句僕の好みのものが着られるやうになつた。

此間に持病の神經痛で惱んで寢たこともあつた。けれども幸ひに輕かつたので下宿屋籠城でも何んの苦もなかつた。もつと強くなつたら看護婦を呼ぶか、病院に入るかしやうと想つてゐた。そうすれば之亦何んの不自由もないと、信ずる。之で僕は一年間通した。就て少々理屈を云ふと結論は妻君の手を煩はさんでも男子獨りで自己の始末をして何んの不自由もなく行かれることを證明した。併し之は物質上の話で、精神上から云ふと靈の不滿足と云ふやうなことがあるだらうと問はれる方があらう。如何にも此點はないでもない。けれども夫れは獨棲の能不能の問題で、男子が女子の手を煩はす煩はさんの問題ではない。僕一年間の實驗は、夫たる僕は妻君の手を煩はさんで不自由なく生活して行けることを明かに證した。既に全く妻君の手を煩はさんで行けるとなると、夫は妻を飯の世話や衣服の世話即ち下女的の仕事に逐ひ使はんで宜いと云ふことになる。尤も僕の妻は僕が斯うして生活して居ても、子供がをるので夫れが爲に非常に忙がしくしてゐて誠に氣の毒だが、併し僕が斯うしてをるので幾分かは其苦を去ることが出來たらうと想つてをる。

世の中の夫たる男子が皆自から己れの身の始末を付けて——僕の一年間のやうに——妻たる女子の手を煩はすことを輕くしたならば、世の妻たる女子の荷は半分は輕くならう。切言するならば女子の奴隸的仕事は幾分か減じやう。僕は女子の獨立、婦女の解放を云ふやうなことは詰り斯う云ふ事實問題で、男子の自活的精神の發揮から得られるものではあるまいかと想ふ。

福田英子女史足下　僕は元來女子崇拜家ではない。男女の間には自然に階級がある。必ずしも平等ではないと信じてをるものであるが、併し僕は女子を男子の奴隸かなんぞの樣に逐ひ使ふべきではない、男女各自は皆自身で自身の總ての始末を付けねばならぬ者だと信じてをる。即ち夫婦と云ふのは誠に唯愛の結合であつて、妻は夫に事へる爲め、夫は妻を使役する爲に結び付くのではないと想ふ。そして今僕の一年間の實驗は之が明に行ひ得らるゝことを教へたやうに感ずる。

海內時事

○嗚呼虛榮の奴隸

建部博士夫人虐待の聲が未だ吾等の耳を離れざるに、早くも博士の新夫人は現はれ候。嗚呼虛榮の奴隸か、幸運の閑雅か、吾等未だ之を知らず候へ共、身は新潟女子師範學校の教諭兼舍監として熱心育英の事に勉とめられし由。齡三十に達して未だ好配を得ざりしこの婦人が、表には快活の笑を浮べても、心の奥に秘めたる煩悶の如何に繁くいかに激しかりしを思へば、平生壯言の吾等だにそゞろ涙ぐまれ候、殊に婚姻の事耳にせし時、小さき胸のいかに躍りしかを思ひては、今更ながら女の身の脆さ、かひなさに泣かざるを得ず候。さりながら吾等は忍ばざるべからず、女は弱ければこそ一しほの堪え忍びを要し候なれ。戰は到底吾等が生命に候。時の權力階級と戰ひて雄々しき最後を遂げ候古來殉敎者の運命は即ち吾等の運命ならざるべからず候。彼の暴漢建部博士の如きは常に吾等が擧つて誅罰を加ふべきものなりしに、何事ぞ村山幾子は遂に彼の情慾の奴隸となりて、此の一大事を沒却し終んぬ。嗚呼吾等は涙を揮つてこの反逆者を屠らざるべからず。吾等は吾等と等しく、脆き體を享け、弱き心を抱ける姉妹の一人を責むるに忍びず、されど吾等の願に反して醜くゝも虛榮の奴隸となりし村山幾子は實に惡むべく罪すべきものに候はずや、滑稽新聞記者が所謂「同衾罷工」は却て吾等が眞面目に考ふべき事に候。建部博士に對してこそ吾等が堅き同盟を以て實行すべかりしを今は遂にあだなる願となり候。千秋の恨事うた、慨嘆に堪えず候。

○吾等が請願の否決

前號の本欄に於て衆議院に於ける勝利を報導いたし候記者は、其同じ筆を以て敗北の事を報せざるべからず候。衆議院は喧囂の中に之を可決し、貴族院は昏々の間に之を否決いたし候。姑らく後者の頑迷を叫ぶを止めよ。近く英國に於ける婦人運動者は多く貴族の婦人に候はずや。選擧權獲得運動の必然起るべきを豫想して、吾等の眞摯なる請願を退け候もの。直接自己の利害に關する彼等にとりてむしろ當然の事と申すべく候。さもあらばあれ、やゝに覺醒の聲を揚げつゝある日本の婦人が、其貴族たると平民たるとに論なく、能く何時迄か壓制の下に默し候べき。一回の蹉跌は二倍の勇氣を生み、二回の逆遭は四倍の奮鬪を姙みて、竟に最終の勝利者たるに至るべく候。志を同うする全國の諸姉よ。願はくは心を强うして來む年の陣頭を望み玉へ。

○女子大學の文藝會

來る十三、十四、十五の三日間女子大學櫻楓會にては文藝會及びバザーを開き、學校關係者及び生徒の父兄、保證人、新聞通信記者を招待いたし候由。これは春秋の大運動會と共に綺羅を飾れる妙齡の婦人が、後の世までの思ひ出に、天晴れの腕前を現はす時に候。かくて果敢なき虛榮の甘酒に醉へる幾多の子女が行末を思へば、いとゞ暗涙の催され候。

○卒業の女學生

毎年本月の初めは、全國の女學生諸姉が醉へるが如き心地して、花やかなる卒業式に列し給ふ時に候。あゝ幾萬の卒業生諸姉!!! 前途に浸々たる辛き波路に諸姉は如何にして凌ぎ給はんとする。將に踏み出さんとする諸姉の一歩は實に危し。虛榮の道か、眞理の戰か。

○琉球婦人の遊學

世の文明は我國の南端なりし琉球島よりも四名の遊學婦人を出すに至り候。中二名は[illegible]政子(十七)、同[illegible]重子(十五)にて共に女子高等師範學校附屬高等女學校に入學し、他の二名は首里區字金城の生れの米須とし子(十九)[illegible]まかど子(十八)にて共に女子大學に入學すべく去月末上京せられし由に御座候。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

戀愛に就て　一

遠藤友四耶

（一）　靈的戀愛とは何ぞや

戀愛は神聖也といふ、然り戀愛は神聖なり、之れ人生其ものが神聖なればなり、戀愛の神聖を汚すものは人生其者を汚すものなり。誰か人生を汚し得む、誰か戀愛を汚し得む。吾人は能く靈的戀愛を唱ふるものあるを聞く、其意義果していかん。肉體を拒む處に戀愛の成立ありや。戀愛は道徳上の愛と同根帶に出でざる也、唯戀愛する同性間に道徳の健在するを可とすべし。而して道徳の健在せざる兩性戀愛の關係とは如何、之れ吾人の問はむとする處なり。心に於て相慕ふも肉に於ては相慕ふを得ずてふ制裁は何處より來れる、其制限と標準とは吾人遂に發見するを得ざるなり。法律の規定も社會の範則も自然の要求を如何せむ。自然の要求は宇宙の要求否神の生命その者にあらずや。斯の自然性を妨遏するものをば吾人の自由もて排除し往き、その生命の活動をして滿足せしむべき也。然り何等の道徳律も戀愛の情緒を制裁す可からず。かのマルサスの人口論の如き出で、一時は戀愛の上に臨坐して之に干渉を試みたりと雖もそは過去に屬する一頁の現象にして事實と學究とは遂に新來、魔王に對する問題の解決に到達せり。嗚、戀愛を妨げむとするものは誰ぞや。道徳なるか、宗敎なるか、自然律か、將た神か、否々決して然る類にあらず、生活條件の缺陷之なり、經濟的不自由之なり、經濟的封建制度之なり。この不都合なる經濟界に存する頑迷なる權者は凡て吾人男女の戀愛生活そのもの、條件を剝奪する者也。戀愛の眞個の要求が滿足を與へられざる結果は遂に靈的戀愛の文字を生めるにあり。而して靈的戀愛てふ思想が、肉交を以て不道汚れたるものてふ觀念孕み來る事茲に久しく、而も經濟的事情の滿足を得るに遑ひては急轉直下の激變を以て肉交を嘉納するもの也。見よ神の許し給ふてふ結婚も、經濟的自由なくんば爲し能はざるにあらずや。而して一朝其位置を得ざるに至らば、神之を許せりと、呵々。吁其神こそ實に經濟界の奴隷なりけれ。

心に相慕ふて肉に相交る事を得ざる世や呪はるべきなり。乞ふ吾人をして肉交なくんば、戀愛なしと、唱ふる者となす勿れ。

（二）　戀愛は結婚を以て目的とせず

戀愛は結婚を以て目的とせずとは、敢て新言奇語にあらざれども、又あまりに的確なる主張あるを予輩は知らず。而して予輩は結婚の要求としては、戀愛を以て唯一缺く可からざるものと做す。戀愛なき結婚は其性質に於て賣春と異らざるなり。然れども結婚するもの、意義果して如何、一居同棲を稱するか、將た儀式禮典の謂なるか、結婚の實體抑も何者ぞ。自由平等相愛扶助の理想に映らして觀たる結婚は果して何者ぞ。階級制度奴隷制度迷信的僞善なる骸骨を去つて其處に結婚てふ實體あるべきや。吾人は敢て言はざるを得ず、戀愛の外に結婚なるものは無意義無用の者たるを。然れども論者あり、兩性は獨占的性能を有すと。予輩を以て之を見れば、更に他方面の性能あり、兩性は獨占的戀愛的なると同時に、互に多夫多婦的要求を有す。故に其性能の如何を以て論義すべからず。吾人は徒に結婚者を難するものにあらず、然れども從來の家庭制度を以て非理想的のものとなし、且つ結婚の名ありてその實は只醜俗なる利己主義の男女が、非社會的に一廓を構ふと云ふに過ぎざるを想ふものなり。吾人は單に戀愛の自由を以て足る。戀愛の目的は必ずしも結婚にあらず、結婚せざれば生活に不自由にして、生活に不自由なれば戀愛の滿足を見る能はざればなり。然り今の世は結婚せざれば戀情を滿足するを得ず、若し戀愛の滿足を妨ぐる者をして斯の社會生活面より一掃せば、戀愛の目的は生殖其ものを追求して敢て他を顧みず、戀愛は遂に戀愛そのものを目的として辿り行くなるべし。

（三）　自由戀愛と一夫一婦主義とは兩立せず

世に放縱なる文字あり、而して曰く、自由は美にして放縱は醜なりと。然り美なるは自由にして醜なるは放縱なる哉。然れども自由を以て放縱なりと誤解する者も尠からず。自由は實に自由なり、何ぞ他意あらんや。會聞く吾人人世にありては絶對的自由を得べきやうなしと。而も絶對的には得られずと言ふをもて、相對界の束縛を許すべけんや。而して自由の絶對界に蹈み入りて、自然性の神園に遊ばざる可らず。最上の自由は最上の謙遜と一致し、至極の放逸は至極の卑劣と一致するものなり。然れども自由と放縱とは隔かく絶緣の者にあらず、恰も平常の心理的狀態が、或は天才的に變り、狂的に化すると等しく、程度問題なるが如し。吾人は須らく自由なる生活を要す、戀愛に於ても然り。而して吾人は今日迄自由戀愛と一夫一婦とを兩立せしめんとして、敢て之を怪まざりしものなることを告白す。然れども今は之を棄てたり。自由の大海に拔手を切つて游ぎ出で、竭きざる戀の潮に浴する時、何ぞ二夫一婦あらむや。二夫三婦あらむや。此處に打ち寄する小波の或は甘く或は辛く、或は薫じ、或は笑み、波と波との打ち混じたる自由の海の自由の子等は獨占もなく、嫉妬もなく、剝奪もなく、情死もなく、夫は萬婦を喚び、萬婦は千夫と睦ぶ、豈樂しからずや、聖ならずや。

見よ遂にかしこに密婦なく、姦夫もあらざるなあ、美はしきは自由戀愛の樂園なる哉此處には一夫一婦の制を許さず、而かも又畜妾道は見えざるなり。

海外時事

○婦人問題の懸賞

紐育婦人社會主義社理事アンナ、ピーツロップの名を以て「婦人と社會主義運動」てふ一般問題を百弗の懸賞に附したり。

其條件は

一、論文は一萬五千字以上二萬五千字以下なること。

二、論文はタイプライト形に書き下して本年十二月卅一日より遲れざること。

三、論文は特別なる政治上經濟上の組織に關係せる如何なる黨派を含まずして、其内容は或特種の組織團體を贔負するが如き事は斷じて排斥すべきこと。

四、論文の主意は最近科學的社會黨の運動に關する題目を基礎とすること、即ち婦人の經濟上社會上の發展を極めて簡略に書き、特に工業史上の資本家社會に於ける婦人の位置に關して注意を拂ふと共に婦人の現狀を叙し單に資本家制度の禁止と社會主義の發達とのみによりて婦人は自由たるべきことを説明すべし。

五、論文には當局者が指示し若は統計學者が引用したる所には根據となるべき精密なる論題を含ましめ出來るだけ廣く分配せんがために議論の論理的に科學的精密に最も嚴正なる證據を立論せざる可らず。

六、論文は一般婦人が解し得べき平易の言語を以て書くべきこと。

七、懸賞者は論文には匿名を用ひ、住所姓名を明記したる別封を添へて送附すべきこと。

八、懸賞に關するすべての事務は紐育市セツト、マアリ街五九八番地、アンナ、ピー、ツロップ宛のこと。

右懸賞に關し、有名なる講演者にして著作家たるチヤロツト、ペルキンス、ギロマン夫人。社會勞働黨總裁フランク、ボーン氏及社會學々校長ウキリアム、チエームス、ヂント氏の三氏其選者を擔任せられ、賞金を處置せらるべし。而て當選論文は一小冊子として出版し廣く配布せんとすと。

我等は我が先進國の同志が社會主義の見地よりして我等婦人に關する研究問題を提起し、而して常に婦人の自由解放の爲に盡瘁せらるゝを深く感謝するものなり。

○學者の重婚論

佛國著名の學者アントニー、ウイム博士は、近者「男女關係の倫理」といへる新著を公にせり。博士は其著に於て一夫多妻即ち重婚を辯護して曰く、國家は其人民にして多數の妻を養ひ、且其子女に國民たるに必要なる教育を施すことを得ば宜しく重婚を許可すべしと云へり。博士は又曰く、若し一夫多妻にして許容せらるれば全人類の道徳上肉體上の福祉に關して多くの罪惡を根絶し、延いては全社會の調和を一層健全に幸福に導くべしと主張せり。

我等の如き一夫一婦を理想とし且之を實行し來りし者にとりては之れ實に驚くべきの説なり。我等は學者の説として之を聽き置くべし而かも我等の信念は曲ぐべからず。勿論今日の夫婦關係に於て我等は唾すべく惡むべき僞善虚欺壓虐の現存するを知ると雖、眞個の一夫一婦と現在の所謂夫婦關係そのものとは之を區別せざるべからず。

我等は男女の地位の同等たるべきもの、同等たらしめざるべからずと思ふもの、且つや此問題たる人心の機微に渉るべき者たるを以て他日詳論するとあるべし。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

農家と理科(二)

増田操

「私しや初生から貴孃さん育ち米の成る木は未だ知らぬ」とは某地方に於て農民も歌へば馬子も歌ひ子守も歌ふ俗謠の一節にして富豪の奥深き家庭に育ちたる、おぼこ娘の無意識なるを冷評したるものであらふ。農家に對して稲とはどんなものであるかなど、問へば小學兒童と雖どもも直ちに米の生る草だと答ふるであらふが稲に就て科學的調査をして見るも一興で決して無用のとでないだらふと思ふ。

凡そ地上に於ける植物の種類が澤山あるが之を大別すれば顯花植物隱花植物の二類である。顯花植物とは明らかに花を開くものにして隱花植物とは明らかに花を開らかざるもの即ち山野に自生する「わらび」「せんまい」などを云ふのである又顯花植物を分つて單子葉植物、双子葉植物、多子葉植物の三類となり更にこれを分つて各科となる。即ち稲は顯花植物中、單子葉、禾本科に屬するものである。

花と云へば梅の花櫻の花の如く可憐なる愛見に比する程で美麗なもの、樣に聞へ稲が花咲く一寸可笑しいやふであるが識君稲の穗が出た時靜かに其粒を採つて解剖して見給へ。雌蘂は中央に泰然と構へ下部の子房は膨れ上部は二叉に分れて其尖の方には各毛樣のものがある恰ど人間の眉毛の樣になつて居るこれを柱頭と云ひ雄蘂の花粉を受る所である、この雌蘂の周圍を取り圍ふて居る六本のものは雄蘂である。其形細長く絲狀にして何れも其上端に小さき嚢狀のものがあるこれを葯と云ひ彼の花粉が此中にあるのだ。又下部の絲狀なる所を花絲と云ひ花絲を包める二枚の薄片を鱗片と云ふ。此鱗片こそ彼の櫻の花が美しいとか梅の花が奇麗だとか賞玩する花瓣に相當するのである、この緊要なる雄蘂、雌蘂鱗片の總てを包めるものを穎と云ひ、後に稃と云ふのである、この穎は花の保護部にして恰も城郭のやふである、穎は二枚より成つて一方は大きく一方は小さい、小さい方は大きい方の兩縁に抑へられつゝ抱き合ふて居る其小さい一片を内穎と云ひ大きい一片を外穎と云ふ、外穎の上部は細長く又細長き鬚狀の生ずるものがある、此鬚を芒と云ふのだ俗に「いが」と云ふものである。これが有無に依つて更に稲の種類を有芒種無芒種と云ふのである。

總て植物には生殖作用を營む機關はあれどもこれのみにては自から交接することか難かしいから風又は昆蟲などの媒介に依つて交接を全ふするのである、風の媒介に依るものを風媒植物と云ひ昆蟲の媒介に依るものを蟲媒植物と云ふ、稲の花の構造は上來説く所の如く雄蘂の葯は其花外に表出して熟すれば細粉となつて飛散し易き狀なれば風媒植物である

却説稲の花が咲く、どんな工合に咲くであらふか晴天の時は大抵午前九時頃から日中に穎を開ひて中から六本の雄蘂が「ヌート」と出るのです颯々と風が吹くと其熟したる花粉が又「フーフ」と飛んで行つて雌蘂の柱頭に止る、そして雄蘂は成るべく自分の花の内に入らぬ樣に、花外に出て風の媒介を待つて居る。雌蘂も又成るべく遠方から好い聟さんが來れば好いがと待つて居るやふである、其時風と云ふ媒介に依つて他の花と交接するのである。恰ど人間社會で或る近親結婚とて身内同士の結婚は良くないとは生理學者など面白い論説もあらふが農家が副産として飼養しつゝある鷄などをして親が子に、子が孫にと順次に孵化して雜交することなければ其雛の漸く體形矮小に品質劣等なるは常に見る事實であらふ兎に角稲の花も互ひ違ひに交接すればするほど良いのである、だから花時若し雨など降る時は假令風の媒介が來ても好い娘が顔を見せぬと云ふやふに穎を閉づるが太陽がキラ〳〵と雲間より見ゆると又開て雄蘂も出るのである。斯の如くして交接し終れば受胎したるものにしてそれより莖に貯へつゝある養分を上部に輸送すれば稲實漸次に肥へ太り熟するに從ひ水分自から蒸發するが故に乾固となり後ち調製して「米」となし王侯宰相より平民に至るまで三歳の童子と雖どもお飯、と調法がるのである、稲の熟するや先づ下部の葉の黄色を呈するはこれ其穗の肥大するに從ひ莖の養分も共に水分を上部に輸送して穗より水分を蒸發せしむる爲である。既に穗が黄色となり其粗を口に嚙んで「カチン」と音の發するは熟期の適當なるものにして若し早きに失すれば青米多く遲きに過ぐれば品質を損するものである斯く説き來れば耕種法も易々たるに似たるも其米や農夫の手足の肉である額の汗である

男性憎からんや

玉郎

『世界婦人』の君、第六號彼の海内時事欄「狂せざるを得ず」の題下に姦夫原〇が藝妓に現を拔かして、爲めに其家庭不和、其偏愛酷遇に狂哭しつゝ夫人は芝のさる家に侘しう居給ふあはれさを君は錄して「世上かゝる例尠からず、げに弱きは女に候、憎きは男に候、我等は呪ひの釘に醜き男の頭を打ち碎き、力をこめし匕首の切先に汚れたる男の胸を刔らざるべからず候、さるにても得たきは經濟上の自由に候はずや」と宣へり。之を讀む我れも男の子の胸にグツと觸るは君の激調なるよ、げに弱きは女子なればとて憎きは必ずしも男子にあらず。さはれ君の言やよし、得たきは經濟上の自由にあらずやと、君之れを得給はゞ、見よ女は自由ならずや。經濟上の自由は根本にあらずして何ものぞ。さるにても其は女にのみ得たきにあらず、今の世の男子にも眞個自由の主ありや、女の君に經濟上の自由を奪ふものは男性にあらず、恨まば今の世を恨め、神か魔か我れ知らなくに女子の敵は彼にあり、憎きは彼れ姦見なる哉。

實に男は君の仇ならず、君よ、自由を得給はゞ男子は憎からず、君よ、女も弱からざる也、實に憎きは現社會なる哉、君政權を得ると等しく亦財權をも得給へよ、あはれ憎むべきは權門の淫者なるを、君夫れ之を悟るや否や。

さるを君が狂はしげなる言の葉のおぞましくもおかしけれ。呪の釘もて男の頭を打碎かんとは、君の本心ならぬ調なれかしと我は祈る。君よ、世界の男性悉く皆原〇ならず、藤猴にもあらざらめ。君の「汚れたる男」なる語はしも全稱か特稱か、君もし「力こめし匕首」をものし給ふて予が前に立ちて見よ。

噫、我れは矢鏃に媚びず諂はず。さはれ女性に憎まるべき所以を知らざる也。我れ男の子の胸、君よ、觸るべからず。

追放

下川村江

街はづれ古き小橋を
いまかゆく君さ旅びと
疲れたる足をひきずり
とほとほと病者のすがた
さとすぐる夜風の冷に
戰慄は憊身を襲ふ。

見かへれば燈は街に
きらめきつ寄際ゆくと
あざむごと天にうつりぬ。
遠に聞くちまたの叫び
たとふれば戰れし獸の
ののじると何かみ聞ゆれ。
ふとうるむ涙にうつり
靜かなるうからの顔の
戀しさは心にうかべど
涸ぞと語ればさらに
口惜しき市人ばらの
「都」こそまへにそびゆれ。

疲れたる足をひきずり
とほとほと病者のすがた
旅人は獨り辿りぬ——
すてられし古き人は
迷ひわたり「都」をおもひ
何處にかはたさまよふ。

噫法廷に於ける田中翁

宇都宮裁判所が下したる有罪の宣告を不當として控訴に及ばれたる田中翁の官吏侮辱事件の公判は、去る十一日控訴院第三號の大法廷に於て開かれた。辯護士は凡べて十有三名、新聞雜誌の記者席は三十人を以て充たされて居る。

例により例の如く住所姓名の訊問から、事實、證據の取調べがある。滿廷肅として傍聽人の眸は一齊に隣然と立てる田中翁の後姿に鍾まつてゐる。

相原裁判長『栃木縣の谷中村買收に對して被告は反對の意見を有つて居るのか』田中翁『絶對に反對でがす』

裁判長は更に證據書類を朗讀して、辯解あるや否やを訪れた、

裁判長『是等の證據に對しては如何だ』翁『そんなは皆虚僞でがす』

栃木縣吏等が谷中村に對する種々迫害の有樣を述べ彼等が如何に奸猾で、殘忍で、而かも秩序ある搜索官の爲め、人民は如何に窮し、如何に惱し、如何に號哭しつゝあるかを陳情して、翁の熱胸より溢るゝ義憤の調、悲痛なる法廷に響き冷らんとする比、裁判長の命により五分間の休憩となつて一同席を寛るげた、

休憩後は辯護人諸士各自各方面より辯論縱横、官何痛快、或は翁が潔癖なりと云はれた村長なる者の、買收に盡力である事を説き、或は翁が同樣の言をなして之を直接のものとするも決して侮辱の意思は無いものなりと辯じ、或は又言論の自由を主張して、堂々辯々涙にその熱辯と誠實、傍聽人をして只管餘音の拍手を爲さしむるのであつた。

最後に青木檢事は起立した。而して買收問題の内容が惡ろくとも、善くとも、被告に關する鈴木村長事務代理は、其買收の當事者にあらず、故に有罪たるを免かれぬと論告したので、我田中翁は蹶乎として起立し、憤然として列座の裁判官に對はれた。而して村長鈴木なる者の有力なる買收役人であるを述べ、聲は益々高く、熱涙滴々湧き、廷内の者をして胸轟り、聲怒り、情緒は索れて骨髓迄も燃えしむるばかりであつた。

『我が大日本の國、一天萬乘の陛下の統べ給ふ御國にあつて、栃木縣の谷中村には法律が行はれて居らぬ……谷中村には白晝官吏の强盜が横行して居るのだ……』と翁の鬚毛失頭になびいて、聽く者をして轉た革命の烽火に燃えしめた。噫翁は古稀である、俗惡醜劣なる今の世に、轗軻と、迫害との關ゆる處は一として不成功ならざるはない、失敗ならざるは無い、嗚呼然れども吁、吾々は此の不成功の失敗を冥ふて我々、の選るべき門を擇り苦き徑路を辿り迫つて終にはかの死の都に到着すべきである。其死は終に生である。

南郊の人に送る

秀湖生

心の底から打わけてくれた君の手紙を僕は三度繰り返して讀んだよ。嬉しかつた、僕はほんとに嬉しかつた。僕等の同志は丁度五六十年前の露西亞の靑年男女の群のやうなものさ。顧ると今の社會は悽慘な暴風雨の闇だね、見給へ、風も、雨も、電光も、何一つとして僕等を苦め惱まさぬものは無いぢやないか。此間に在つて只一つの生命は、同志の友情だ、目黒、澁谷、角筈、柏木といふやうに郊外の靜かな森のほとり、岡の上に住みわぶる友を訪れて、春の日、秋の夜、小さき窓に倚つて人生を語り、社會を論じて、眼に新しい生命が輝く時、胸に熱い血汐が躍る時、僕等は初めて深い悲哀と憂愁の手から離れて、ほのかなる歡樂を覺える事が出來るのだ。けれども此歡樂が恐らくは世の何ものにも換へ難いのではあるまいか。

或者は老ひたる父母にそむき、或者はやさしき弟妹を捨て、或者は親切な師君に見離されて、たとへば暴風雨を衝いて來た磯千鳥が、濱邊の巖窟に身を潜めながら、ぬれ羽をピッタリうち寄せて、互に睦しく語るやうに、天地は情なく荒ぶけれども、それが反てうれしい友情の力であるのだ。君、此纎弱い小鳥が、小さい翼をうちふつて、怒風と狂瀾にさからつて立つ姿を見て呉れ給へ――たとへ一歩にして十歩退いても。

君、僕は全く君を知らなかつた。君が少からぬ資產家の子である事は知つて居た。君が幸福な圓滿な家庭に育つた人であるといふ事は聞いて居た。また、君が世の常の貴公子と撰を異にして、世事に對して非常な寛大な襟懷を持つて居る人であるといふ事も、君と語を交してからは知つて居た。けれども僕は遂に君が、あれ程に僕等に同情して居て呉れるとは知らなかつた。君が僕等のかくれたる同志の一人であるといふ事は夢にだも想はなかつた。

君の愛人の事も薄々は知つて居た。けれどもあの涙多き君の手紙によつて僕は初めて精しい事を知り得た。噫、家に有り餘る資產と、慈愛の情深き父母とを持てる君も、遂に君が抱ける時代の新しい生命に對する、舊き社會の習慣、道德の壓迫を免れる事は出來なかつたのだ、果然人生には恐ろしい、傷ましい生存の爭闘があると共に、又生命の爭闘もあるのだ。

社會に缺陷があればこそ、其必要に應じて藝妓もあり、娼妓もあるのだ。社會の習慣、制度の認めて居る間は何ものにも道德的の價値は存在するのだ。君も知つての通り、僕等が昔から例の廢娼運動等に同情しなかつた理由は此點に在るのだ。僕等は娼妓其ものに對してすら猶此態度を持して居るのだ。まして罪のない寮の人に何の距があらう。噫社會といふものは慘酷なものだ。其必要に應じて、其制度を認めて、猶其上に酷しい稅金を徵收して置きながら、賤業とか醜業とかいふさへあるに、罪も因緣もない寮の人にまで、慘忍の刃を揮ふとはほんとに奇怪ではないか。

あはれ世をかね、身を墜ちて、紅梅花さく郊外の寮に人となつた君の愛人といふのは、どんなに優しい人であらう。まして立派な敎育もあり、智識もあるのだ。決してこんな醜惡な社會に負けちやあいけないよ。いと微なれども君と君の愛人とは、今暴風雨の闇に一穗の灯をかゝげたのだ。君、二人手に手をとつて、決して其灯を消しちやあいけないよ。

此手紙に添えた一束の野花、之は鐵形草といふので、きのふ戶塚の田圃から採つて來たのだ、名もない路傍の草にも思はぬ美があるかと思ふとうれしいではないか。まして此花が、菫の花よりも早く、まだ水に雪の味ある此頃を早くも咲き初める處などは、君に贈るにふさはしいではないか。僕は初め此花の美に動かされて、どうにかして名を知りたいと苦心した末、圖書館で近頃買ひ入れた「ワイルド、フラワー」といふ書籍の中から挿畫をたよりに辛うじてスピードウエルといふ名を索め得た時は實にうれしかつたね。それから久田二葉君に手紙で問ひ合せて鐵形草といふ和名を知つた。二葉君と僕との友誼は此鐵形草を媒介に結ばれて、それからは互に百年の知己を以て相容して居た。處が僕と同年の二葉君は此秋病の爲に西ヶ原の客窓に短かき春を葬つて仕舞ふた。さらぬだに孤獨の身の、今日一友を失ひ、明日又一友を失ふ。春は早くめぐつて鐵形草は再び咲いたけれども、二葉君とはもう永遠に相見るの機がないのだ。

君、スピードウエルはあはれな花ではないか。僕は亡ふた薄命の友の紀念として、更に之を新なる友の君に贈る。君が今抱ける程の新しい生命を永遠に失ふて呉れなかつたならば、僕は亡はれたる一友の短き生命を、君に於て更に永き現在に認め得るのである。

其優しき寮の人が、平民新聞の熱心なる愛讀者なりと聞いて、僕は影ながら喜んで居る。噫よき日よ、君と君の愛人との上にあれ。(完)

夕陽社詠草

ある人に代りて　梅の助

見しや夢あひしやうつゝ面影の枕にかよふ寐の宵ざめ

分れかね涙の袂くらぶれば同じ心の月ぞくもれる

あらぬおもひ　有香

たらちねのみ墓の露よ人の生のなやみに勝ちし綠のおもかげ

何をかも吹くらむ笛の音もたゆみ氷川の杜に夕月かくる

榮光の花輪さゝげむ我れはしも高きおもひに散らせよ君

東風吹かばほころびてこそ梅の花理想の君と香をなつかしむ

よき人の情をこめし萩の餅を頰張る男の憎くもあるかな

熱たかき情の焔よ戀かそも月も咽ぶと涙もろくて

心あらば叩けわが門をすみれ咲く野邊をながめて歌がたりせむ

土筆さく野邊に連なる窓にひとり夕日の森の靜寂をし偲ぶ

人をおもひ歌に耽れる春の夜をひきがへる鳴く我窓にして

我が友[illegible]多年の養家を解決して遂に養父母を捨て、獨立の子となる

幾年をまめに仕へし優し君も起てるか悲運養父母ふりすてゝ

富豪萬野屋とすてゝ君悔いず理想のかげにたゞあこがれて

三歳にして養はれ子と屈みきて男の子と起つに何ためらはん

父母を蹴て國に殉ずる人をめでよ人道の前に我れや意氣の子

滿身の力こめたる步みにも後れがちなる君が門出よ

ふりすてし親をおもひて泣く君を慰めかねつ我れ朧くして

詩人の高調

神川松子

オ、云ふ勿れ　問ふ勿れ
思ふも果敢な人の世に
惠みの光ぬば玉の
闇夜を照らすものありと。

オ、云ふ勿れ　問ふ勿れ
情はうすき人の世に
心のゆかりなつかしく
赤誠こめたる友ありと。

オ、云ふ勿れ　問ふ勿れ
蝴蝶の夢の人の世に
宿世の契り千代かけし
聖なる戀の花ありと。

オ、云ふ勿れ　問ふ勿れ
いづれ行衞は流水の
消えてあとなき人の世に
熱き相思の影ありと。

オ、云ふ勿れ　問ふ勿れ
獨り淋しき人の世に
花の心も芳んばしく
長閑に匂ふ春ありと。

オ、云ふ勿れ　問ふ勿れ
運命はもろき人の世に
胸に秘めたる我が戀を
語る正しき友ありと。

オ、云ふ勿れ　問ふ勿れ
汚れはてにし人の世に
眞如の玉のいときよく
濁流に染まぬものありと

オ、云ふ勿れ　問ふ勿れ
緣は遠き人の世に
また來む春を夢みつゝ
なほも逢瀨はあるものと。

オ、云ふ勿れ　問ふ勿れ
榮華をほこる人の世に
天神の與へしいときよき
まことの美態あるものと。

オ、云ふ勿れ　問ふ勿れ
權力をたのむ人の世に
浮世を外のパラダイス
自由の花園あるものと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小說 梅の花

（上）雪紛々　　谷尾水紫

靜雄は柔順しい、温和い性質で、殊に女と云ふ文字には一種深い同情を持て居た、夫れは彼れが性質已に女性に同情すべく出來て居るので、世の中のあはれな儚ない世間話にも耳を傾むくる樣に、涙を零す樣に出來て居たのであつた。

彼れは餘りに男性が女性に加へる暴壓主義が、彼れの理性に反して居たゝめに、終に男性てふ一個の野獸性を全然非認して仕舞たのである。之れと共に女性に對する同情は益々彼をして强からしめて、終に彼れ自身すら、以て女性的崇拜者と化して仕舞ふたのであつた。であるから凡てが彼れの頭には男性てふ者の成す事爲る事は、非常に壓制な、暴猛な、狠の樣なものと見えるのである。

彼れは何時も此業な事を人によく語るのである。

「何故に男てふものは、純潔な處女の節操を種々な誘惑手段で穢がさねばならぬのであらふか、夫れが抑も男性てふものゝ固性本能であるとは思はれぬ、女性を愛するてふ語は那邊に解釋せられてあるのであろふか、彼れ等が愛とは憎くむてふ意味の語ではあるまいか―」と。

此樣な靜雄の事であるから、夫れは〳〵女性てふものに對しては、やさしいと云はうか、親切と云はふか、丁度同じ女性の朋友同士の夫れよりも、一層も二層もやさしいので、自分が男性である丈け夫れ丈け深い同情を持つて居たのである。

夫れでも女に誰れにも彼れにも親切に口を利き、慰藉を與ふべく進んで勉めようとするのではない、只常に心に同情して居るので、女とさへ云へば手を添え相擁して何とかするてふ樣な事は、靜雄のよくせぬ處であつたのだ。

何時であつたか、村長の勝りのお糸が慶治と云ふ東京戻りの學士樣に、無理往生させられて、固く契つて居た賢造に對して濟まぬとて、車川に土左衛門と成つた折にも、靜雄は殊に之れを悲なしむで恰も妹が亡くなつたかの樣一ヶ月斗りも鬱參を續けて居た程であつた。

此樣な心掛の柔順しい靜雄の事であるから、村中娘子たちの熱は隨分高かかつた、けれども夫れは靜雄の理想の高い丈け夫れ丈け彼れ等の戀は淺薄であつたのである、故に靜雄には屆かない、又彼れ等の凡ての戀なるものは、所謂靜雄が理想として居る戀ではなかつたので、彼れ等の夫れは靜雄であろふが、權次であろふが、其男らしいすらりとした脊の高さや、落付いた物の言ひ振りや、長面に太い眉毛がきつと黑く、露の月に照る樣な表情の深い瞳や、宣教師のによく似た高い鼻や、凜としまつた口元やが、つまり彼れ等の多くが戀の目標であつたので、靜雄はそんな皮想な戀愛主義は持つて居ないのである。

偖靜雄の友に清策と云ふ男があつた、此男は一寸とした資產家に生れたのであるが、性質が靜雄とは丸で異つて、若いのに似ぬ一種片意地な頑固な一徹な男で、次男であつた爲めに別家して、一寸した商買を遣つて居た。靜雄は或る家事の關係から、此清策とは放れられぬ因緣もあり、尙は清策が一徹に生れ付いて清策一家の者に踈とまれて居るのに、少なからぬ同情を持つて居る處から、好かぬ乍らに、其樣に踈くもせなかつた。すると此清策に隣り村から嫁御寮が來る事と成つた。嫁と云ふのはお時と云つて今年十九の愛くるしい娘である、此娘も相當な資產家に生れた爲めに終に資產家階級の犧牲とせられて、此清策に嫁する事と成つたのである。然しお時は父母の命令に越す何物の存するをも知らぬ、否な如何なる犧牲も辭せぬ的な滿足すべき理性を持つて居る可憐なお時であつたのだ。

お時は隣村切つての美しい仇氣ない娘で、年は十九の姉樣でありながら、丸で十二三の乳臭い處があり〳〵と見えて、そしてまた非常に感情の强い娘であつた。お時樣と清策さんとの緣は、お月樣とすつぽんだと村中の評判も、穴勝ち清策を憎む爲めの夫れ斗りでもなかつた。

夫れでお時と清策とはまづ心はお月樣とすつぽんであれ何であれ、神樣に結んで貰うた立派な夫婦と成つたのである。

して居る内に清策は病氣にかゝつた、あらゆる醫藥を盡したが追々衰へる斗りで、お時の心配は一通りや二通りではなかつた。二百日と云ふもの帶を解いて寢た事はないと云ふ事。

したが可愛想に清策は花の樣なお時を殘して、終に〳〵再び歸らぬ旅へと立つたのである。

あはれ清策も可愛想だが、跡に殘つたお時の若い〳〵寡婦さんも可愛想ではあるまいか。

お時は毎日〳〵涙と共にあか桶提げて墓參に行くのであつたが、偖變り易いは人心で、清策が達者な時は嫂のお里もちやほや云う、出入の者も御寮人で持て囃す、お三殿も一つ返事で尻輕に働いたが、清策が亡くなつてからは、手の裏と云はふか、がらりと變つて、家政の事から、春秋の衣裳やら、何やら彼やら十九や二十の寡婦さんが心配せねばならぬ境遇と成て來た。お時は一入悶えた、世の中の人情は紙よりも薄い事を味はつて、頼み甲斐なき儚なさを泣くのである、……さあ最早う今迄の無邪氣な仇氣ない嫁樣では居られぬ、……と云つて誰れも相談に乘るものは一人もない、……有れば夫れは例の靜雄か、憎む誘惑者斗り

・　・　・　・　・　・

靜雄は之れを見、之れを聞いた……何んと靜雄は之を聞いたのであらふ?

閑窓錄

神川松子

△黄鳥の心

ものうげに、行く春を送る黄鳥のこゝろは、げにも哀れなものである。春戀花の情を惜しむけれども、夜半の嵐の吹くからには、落花の愁情語らむに詮もない。かくて哀々別離の涙に復來む春をちぎりて、青葉の蔭にその姿をかくしてしまう。されど嗚呼傷心の黄鳥よ、汝はそもまた來む春に何を語らむとはすなる。思へ、盛者必衰の浮世の常習！昨日影消えし春は、また永久にかへり來るべきでない。今はたゞ戀々回顧の情にせめてもの慰藉をとゞむるのみである。

△桃花流水

今日は三月七日、桃の節句もはや四日の昔となつた。桃花流水の情に人生を果敢なむと云ふのではないが、衷心何となく孤寥の感に堪えない。もとより孤寥寂寞の我がライフは、天意のわれに示すところ、それを强いて脱してまでも、花蝶の夢に春夜の快を貪らむとするのではないが、しかし心胸は實に淋しい。思へば痛恨悲痛の我世である。語らむに友もなく、身は幾多の怨敵にせめられて、夜々旅窓に結ぶ夢は、たゞ花なき寂寥落寞たる秋を偲ぶのみである。

嗚呼かくて多恨の遊子が、今や人生の無情に倦んで、人知れず落魄の胸につゝむ幾その悲涙は、そも何を語るであらう?!。げに哄笑の極、外面に快活を衒ふ革命女人の衷心も、あはれ、か弱いものである。

△無言の詩

二三日前机上の花瓶に挿した梅花二三枝が、今日は爛開の花をもつて、清香芬芬、如何にもほろ〳〵として、このせまくろしい陋屋にも藹然春の面影を浮ばしむるのである。われ暫時默然として花容に對すれば、花神の情緒來つて我を播かすか、頑强粗野なる我が心も、何となく春めいて、聊か日頃の狂態に似ぬ思ひも浮んで來る。噫、自分が詩人文士であらば、こゝで一句咏み出づるところだが、如何せん、持て生れた無風流な身には、たゞ無言の詩をもて、花神の美を賦するに過ぎないのである。

呼應寸束

○廢村の堤に殘る櫻かな　　守澤美津志

○亡國の憂士は逝きて春寒し
陽炎や獨立堂の屋根の上　　赤羽一

○今日は議會で失禮仕りました、實に今日の貴族程頑迷不靈の守舊黨はありませんよ、彼等は社會進步の途上に於ける大なる妨碍物ですな、我々勞働階級のみならず、又婦人の大なる仇敵ですな。　　山中慶太郎

○渴望の「世界婦人」御送附被下早速讀み了りました、噫主義の爲め百萬の庸衆を敵として奮鬪し、反抗の聲を絕叫せらるゝ其冲天の意氣實に敬服しました、僕も乍不及同志にも傳道し、且婦人にも讀覽をすゝめる積りです、希くは今後も主義の爲め一層の活動を祈る次第です

（後略）

寫眞の說明

前號「雨中の撮影」てふ題にて說明したる本文は、本號第一面の寫眞之れなり。此寫眞を見て誰れか我が愛愛たる谷中村民の窮狀を直感せざる、彼等は物質に於て精神に於て如何に困苦窮乏を嘗めつゝあるよ、彼等は飢えたり、彼等は疲れたり、或者は病めり、或者は斃れんとせり、而かも猶克く頑强なる政府當局者の非行に對して、最後まで踏み止つて戰へるなり、彼等の現狀の如何に悲慘なるかを察する者は、他面また彼等の堅剛强きを賞讃せざる能はざる也

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ヘンペックド、ハスバンド

（上）

原 霞外

「放逐て了へ、ソンな婢わ……」

此言が街且にも、校長閣下の御口から出た言葉だ。亂暴――恰で、何時も校長閣下御自身の口癖の「車夫馬丁の如き品性の下劣な輩」の言ふ如な――紳士にもあるまじき――其態度、眼を怒らし脣を嚙み、而して拳を固めて卓子を叩くのと、靴の踵で板の間をシタヽカ蹴ると同時に突つ立ち上つた。

池並源吉は唯だオロ〳〵、無闇に頭を下げるばかり。

「これさ池並君、君は餘程變だせ今日は、えッ君、校長閣下の御立腹は御道理だ何處の國に君、妻君に命（プッフッフッと笑つて）せられて遅刻や、欠勤をする奴があるものか、馬鹿々々しい、よしんば又ソレが事實であつたにした處でだねえ、同僚に對してなら冗談とも聽けやうが、君、校長閣下の御詰問に對して「愚妻が命じましたので」とは何の事ッたいソレやあ。君ッ氣は確かかね」

校長の信用を得る――と言ふよりも寧ろ校長の寵を得る事が、唯一昇進の途と大悟徹底した、怜悧なる訓導――園栗廣雄君は、「機會を捉へよ」てふ成功學第一篇第一章の句を平常暗記して居て、かゝる際にも、其應用を怠らぬのである。

「園栗君、無益ですよ此男は、神經が麻痺して居るんだから……」

言ひ作ら校長は、卓子の上に在つた小形の古手帳を無雜作に引ッ摑んでポッケットに押入れさま、クルリ入口の方に身體を向けると、ジロリ睨目、池並の頭を睨み下して――途端、木の頭とある可き見得。

「神經の麻痺した人、常識を失した人、（更に一段聲を高めて）發狂者に大、大切な生徒は預けられぬから……」。

捨臺詞。フカッカッ、出て行かうとする後から、ゴム人形のやう、跳ね上つて縋りついたは、わゝ憐れむ可き池並準訓導源吉先生。

「何、何、何卒か、シ、シ、暫く……」

「何ですか、何か用か……」

「わ、わ、私は、決して、決して發狂はして、して居りません、情、情、情願か御勸辨……」。

「御勸辨ッ、何を勸辨するのですか……」。

「そ、そ、其、ち、ち、遅刻、け、欠勤……情願か、以後」

「愼しまんでもえゝです、遅刻と欠勤は妻君の命令だと言つたぢやわ無いか、妻君の命令で遅刻したり欠勤したりするのなら、何にも其命に反して愼しむ必要はあるまい、又勸辨してくれと言ふ必要も有るまい……」。

「ソ、ソ、それは其、能く愚妻に意、意見を致します……」

「ウハッハッハッ、誰れが君の妻君に意見するんだ……」。

「わ、私が……」。

一座悉く腹を抱へた。但し此の處、某時に某と言ふ――小學校教員室、時刻――午後三時の退校時間を經過する事一時間。校長、園栗訓導兩人の他に、男教師二名、女教師一名合して五名。各自歸宅の準備既に調ひたる光景、と知るべし。

池並源吉は哄と起る笑ひ聲に喫驚したか、ち、急に顏をあげたが、恨めしげに一座を眺めて、再び頭を下げた。其額其頸筋によ、冷汗ビッショリ。

校長は踵を回らして大股に二三歩、舊の座に戻つてドカリ椅子に腰を下したが先刻と打つて變つて、兩眼稍々細く、唇に微笑――註に曰く此微笑は勿論、次に其唇の開かるゝ時は、冷嘲の言葉の出づるを豫告する際に用ゐらるゝ微笑也。而も先づ發する言葉は優しく、薄い疎らな髭を捻りつゝ

「君の如に、ソンなに頭ばかり下げて居ないで、打ち解けて語らうぢや無いか、えッ池並君、成程、吾輩は少し言ひ過ぎたかも知れぬ、ソンな婢は出して了へは少し酷かつた、コレは謝罪する……」。

「イヤ然で無いです……」。と

園栗君は椅子を離れて起立「議長ッ」と呼ぶ如な態度。

「池並君、校長閣下は君に妻君を出して了へと仰有つたが、何も君が君の妻君を放さうと遂すまいと、決して吾曹が容喙すべき必要は無い、併しだねえ、閣下のわ、仰有るのも、畢竟は君の名譽と幸福を思召すの餘りの御言葉だ、怒る所か大に感謝しなきゃ不可ないよ君……」。

「ソ、ソレは勿論です……」。

「然だらう、既にソレが解つたら速かに妻君を離別し給へ、君があの婦人を妻として居る以上は、一生成功の期は來ないよ、君が妻君に意見（プフ、、、）すると言ふが、遅刻せよ欠勤せよと言ふ様な命令（プフ、、、）までも唯々として之を奉じ以て其御機嫌をとらなければならぬと云ふ妻君に對して君がだ――失敬な事を言ふが君怒つちやわ不可ないよ――何ふして意見が出來るんだ、恐らく君は妻君に對して一指だも觸るゝ（プフ、、、）――先あソレは兎に角、ソー言ふ有樣では、第一君、此學校に奉職する事が出來ないぢやわ無いか、如何に校長閣下が御寛大でも、妻君の命令で遅ッ……」。

「ソレは園栗君、愚妻でも理由なくして言ふのでは無いです……」。

偉い矣、窮鼠、將に猫を噛まんとして身構へたり。

「はゝ、わ、ヂは何か理由が……」。

「有ります……御覽の如く私は、過日來流、流行の寒冒で、非常に苦しんだですが、強て出勤して居るんです、併し愚妻が、心、心配して、餘り無理をしちやわ不可ないと言ふんです……」。

「成、成程ッ……」。

「ですから、少し熱の高い時は、強て私を止、止めて出さないんです、わ、わ、餘り寒い朝は、モ少し暖くなつてから出ろッて、私が出ようと思つても靴や辨、辨當箱を、か、か、隠して……」。

「ウハッハッハッ（これは校長）ハ、、、（これは園栗）フ、、、（これは二名の男教師）ホ、、、（これは女教師の聲色）……」。

「遅刻、し、しては濟まないからと言つても、何に命あつての物種だ、少許の月給より身體が大切だ……」。

「えッ……」。

「ト申しますから、月給の爲に濟まないのぢや無い、國家の爲にと言ひますと愚妻の申しますには「妾は國家より良主が、と其――愚妻は非常に私を愛して居ますので……」。

「キャッ」と叫んで園栗は板の間にデングリ轉つた。

「馬鹿ッ」

校長の面は再び……

「まあまあ閣下……」。

腰を摩り乍ら起き上つた園栗君。

「あゝあ驚いた――併し君は幸福だねえ、まあまあ閣下暫らく――、それわ無理もないです校長閣下、元が墮落女學生で牛肉屋の女中上りですもの、えッ御存知ない、然ですか、池並準訓導令夫人みち子の方は其昔女學生だつたんで牛肉屋の女中と墮落した所へ、幸か不幸か、わッ失策ッ……」。

兩手で吾が口を押へたが既に遅し。入口の扉は開いてギラリ、夕日は一座の眼を眩じたかと思ふと、扉はピタリ畫の如く――但見る一個亂髮の美人、瓦斯銘仙に黒繻子の襟つけたる袷、[illegible]の頸には銀鼠色の半襟。これも黒繻子と水色と淡茶との市松に染めた縮緬の晝夜帶引ッ懸けに結んだるが、髮はと見ると、銀杏返しにツグの小櫛、前述の如く亂髮ハラリと白い額にふりかゝるを、右の纖指でソッとかきあげ、左の手は懷にあり、稍々反り身となつて、園栗の前にスックと立つた。

「オイ園栗さん、モ一度言つて御覽、今言つた事を、オヤ誰れさ。袖をひくのは、アラ吾夫さん、吾夫さんは默つてスッ込んで御在。ホオ、、校長さんなの其處な夏向きのお猿さんわ、アラ失禮な、勘忍して頂戴な……」。

○萬國基督教青年會大會

曰く博覽會、曰く記者大會、曰く佛教大會、曰く何、曰く何。今の世は會がなくては夜の明けぬ代に候。萬國基督教青年會の大會も、理屈のつけ様はいくらも有之候はんも、要するに一個の御祭り騷ぎに過ぎず候。諸國の名士は近頃もてはやされ候日本てふ國を見物すべく渡海はるゞ渡來せられ、全國の會員は、昔にのみ聞きし諸名士の風采は如何なるものかと博覽會見物旁々出掛けし者なるべく候。若し萬々一にも之れに異なる希望を以て來會せし人は必らずや多大なる失望の念を懷いて歸鄕せられし事と被存候。殊に今回の大會を利して新に女子青年會の日本にも結ばれ候は敢て不可なりと申すには御座なく候へ共、之等所詮は虛榮の競爭場たるに止まるべく候へば、この宗教を生命とする敬虔なる婦人諸姉の、毫も入會の要なき事と信じ候。（市内特事）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の御肌には殊に効驗著し

定價　大瓶廿五錢　瓶入十二錢　袋入五錢　小袋三錢

本舖　ライオン歯磨發賣元　東京神田柳原川岸　小林富次郎

中村春雨君著

人の母

定價五十錢　郵税六錢

穩健なる着想、靈妙なる筆力、運命に掀飜せらるゝ人生の徑路を寫して、暗涙の中に爛灼たる光明を認む。篤き信仰と、温き同情に慰められんとする者は本書を讀め。

發兌　東京市京橋區尾張町二丁目　（振替貯金口座五五三番）　警醒社書店

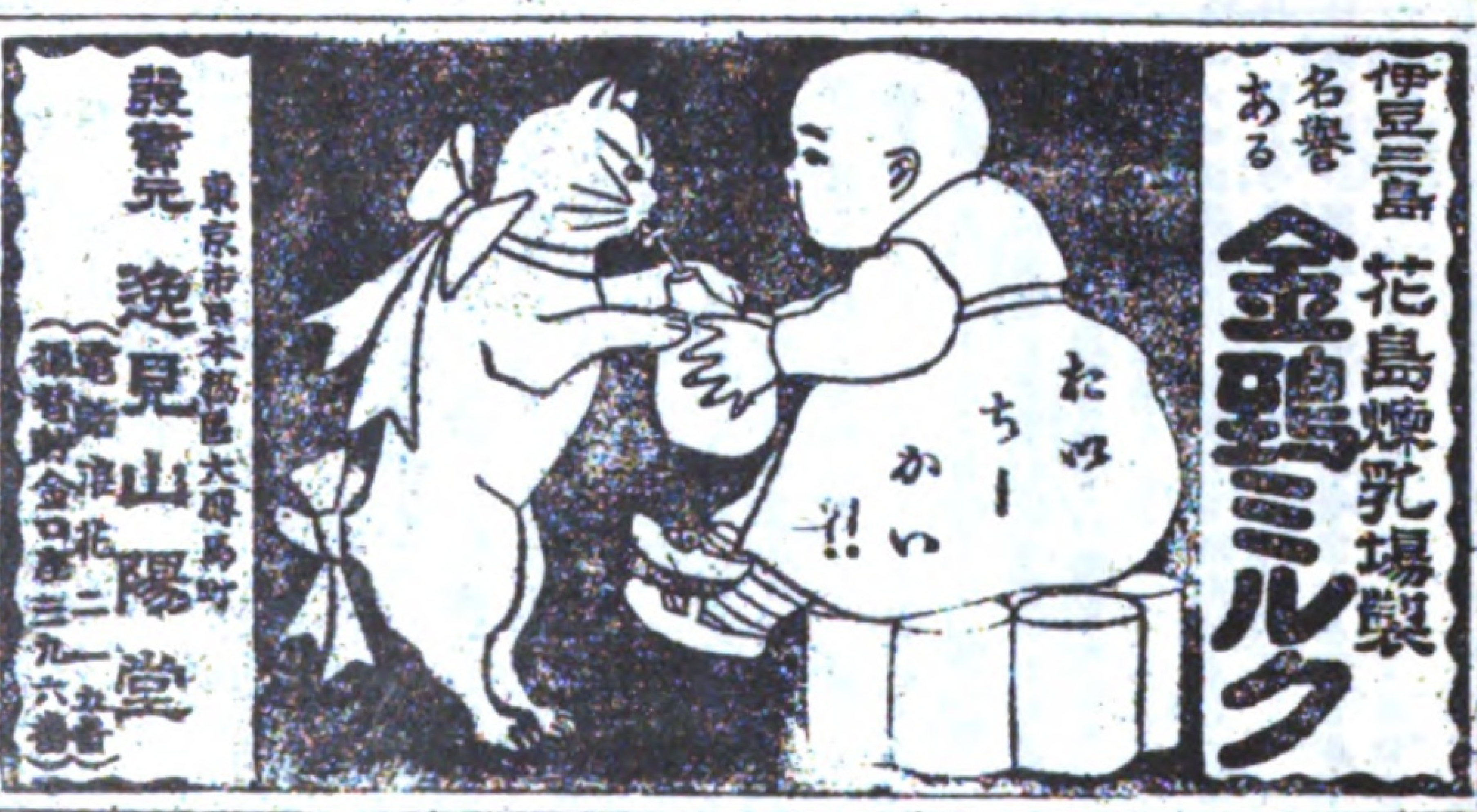
瓦斯引用の大御便利

燈火用　煮焼用　煖爐用　機關用

瓦斯の取附費用（材料共）總べて申受けざる事に改め瓦斯管代は御自辨と金九十錢以上御好の品を取附け可申又瓦斯燈は一燈に付竈、七輪、西洋料理器、湯沸器等は御望に依り月賦にて最も割安に販賣可仕瓦斯煖爐は別に損料貸の便法を設け低廉の料金にて御貸渡可申上候「メートル」の位置迄の取附費用を申受けず又機關は御便利の爲め英國製最優等品を三ケ年迄の月賦にて最も割安に販賣可仕候

○御申込は電話、はがき、口頭にて御通知次第係員出張可仕候

神田區錦町三丁目　東京瓦斯株式會社



○英文英語朗讀法　エリオツト先生著　定價貳拾錢　郵税貳錢

○英文單純生活　チヤーレス、ワグナル著　定價三十錢　郵税四錢

○英文基督の事實　カーネギー、シムソン氏著　定價拾五錢　郵税四錢

○英文廿世紀新約全書　ヘリソン氏原著松本券枝君譯　定價壹圓廿五錢　郵税拾錢

○兒童研究　青山學院教授山田寅之助先生著　上製七拾錢　並製五拾錢　郵税八錢

○埃及聖地旅行談　佐藤康吉君著　定價五拾錢　郵税八錢

○平和の福音　神學士田中達君譯　定價四拾錢　郵税六錢

○哲學の諸問題　神學士四田中達君譯　定價參拾錢　郵税四錢

○神の觀念　神學士田中達君譯　定價參拾錢　郵税四錢

○人の運命　根本正君譯　定價四拾錢　郵税貳錢

○日々の力　根本正君譯　定價五拾錢　紙製參拾五錢　郵税六錢

○女子立身傳　古谷新太郎君編　定價四十錢　郵税八錢

○はなしの園　定價三十五錢　郵税六錢

○青春の危機　濱田勝四吉君譯　定價參拾五錢　郵税六錢

○生ける基督信徒　クヨン、モオット先生演説護浦文雄君譯　近刊

目錄御入用之御方は貳錢切手を添御申越あれ

內外書肆　東京市京橋區銀座四丁目壹番地　教文館　電話新二五二六

各國語聖書、基督教書類
其他一切新刊書類確實販賣
東京神田區猿樂町二十五番地
振替貯金口座六三三〇番
中庸堂書店

●歯科治療　自午前八時至午後六時●

神田區須田町廿六番地

歯科醫　吉瀬才一郎

勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意晝間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

家庭之友

第五卷第一號　四月三日發行

▲去年の花▲神は愛也▲藤の教訓▲悲哀と歡喜▲涙を拭へ少年少女の教育

親たるの準備

▲新渡戸博士の家庭談を聽く▲ハンカチーフの糊付方▲同しみぬき▲塵埃と衣服の壽命

家族的花見の趣向

▲花見團子（料理）▲便利にして調法なる米櫃▲子供と文章

新生活と老人（舅姑の壓制に苦む婦人は一讀せよ）

▲家政問答▲育兒問答▲消息

○一冊郵税共六錢一年六拾錢

○四卷合本新成郵税共七拾錢

堺利彦著　家庭の新風味　定價壹圓　郵税拾錢

ワグネル原著　吉川潤二郎譯　人生の福音　金五拾錢　郵税四錢

吉川潤二郎譯　人生の實務　金五拾錢　郵税六錢

吉川潤二郎譯　人生の行路　壹圓廿錢　郵税拾錢

中里介山　トルストイ言行錄　金參拾錢　郵税四錢

百島冷泉　トルストイ短篇集　金參拾錢　郵税四錢

（販元）東京駒込西片町十　內外出版協會

福田英子女史著

妾の半生涯

菊版美本肖像入

▲定價三十五錢、郵税六錢▼

第四版既に賣切更に第五版を發行致し候大井憲太郎等と共に有名なる大阪事件に與せし女傑景山英子は即ち本書の著者也、彼女の幼少が郷里の才媛として如何に譽高かりしか、彼女如何にして大阪國事犯に與せしか、在獄三年の生涯は如何なりしか、如何にして情人と離れ、如何にして良人を得たるか、更に妻女として赤貧なる、慈母として悲哀なる、寡婦として多恨なる彼女の生活は如何なりしか、本書は、實に其の曲折波瀾、錯節纏綿せる一個の大悲劇を描ける也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY